

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし				
(学術論文) 1 学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の教授活動 (修士論文)	単著	平成27年2月	群馬県立県民健康科学大学	学生の学習への主体性促進を意図して看護学教員が実践している教授活動を明らかにすることを目的とし, 全国の看護系大学・短期大学・専門学校に看護学教員を対象に質問紙調査を行った。ベレルソンの方法論を参考にした看護教育学における内容分析により分析した結果, 看護学教員は, 学生の学習への主体性促進を意図して32種類の教授活動を実践していることが明らかとなった。また, これら教授活動は10の特徴を示した。
2 学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の教授活動 (査読付)	共著	平成29年3月	群馬県立県民健康科学大学紀要, 第12巻, p. 17-31, 2017	修士論文の一部を加筆修正し投稿した。本研究の調査, 論述等は単独で行い, 共著者に助言を受けた。 共著者: 山口幸恵, 松田安弘, 山下暢子
3 中堅看護師の研修参加理由と意図して選択した研修内容—自己研鑽につながる学習支援への示唆— (査読付)	共著	平成29年9月	国立病院看護研究学会誌, 14(1), p. 46-55, 2018	中堅看護師の研修参加理由及び意図して選択した研修の内容を明らかにし, 中堅看護師の自己研鑽につながる学習支援への示唆を得ることを目的とした。方法は, A院の中堅看護師を対象に質問紙を用い, 平成27年度参加の研修内容と参加理由, 平成27・28年度の「魅力的なプログラム」, 「学習ニーズアセスメントツール—臨床看護師用—」を調査した。研修参加が増えた対象の参加理由の記述は内容分析の手法を用いて分析した。研修参加が増えた中堅看護師の研修参加理由は「研修参加ポイント制の導入」「学習の必要性の認識」等であり, 研修参加により, さらに学習ニーズが高まっていた。また, 中堅看護師が意図して選択した研修の約6割は「日常看護の刷新と専門化に関する研修」であった。中堅看護師の自己研鑽につながる学習支援として, 自身に必要な学習を評価できる機会の提供, 学習成果の承認, 個々の目標に叶う研修に関する情報提供や参加を可能にする勤務調整の必要性が示唆された。 本研究の調査を共同で行った。共著者と検討しつつ, 全論述を担当した。 共著者: 松岡宣代, 山口幸恵
4 学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別教授活動 (査読付)	単著	平成31年3月	常磐看護学研究雑誌, 1, p. 27-36, 2019	学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別教授活動を明らかにし, 授業形態の特徴に応じた教授活動への示唆を得ることを目的に, 全国の看護系大学・短期大学・専門学校に所属する教員が記述した, 特定の授業形態における学生の学習への主体性促進を意図した教授活動を分析対象とし, 授業形態別教授活動の頻度を算出, 特徴を検討した。講義・演習時に最も頻繁に実践されていた教授活動は《2. 学生の内発的動機付けを高める授業を設計し展開する》であり, 実習時は《7. 学生の理解促進と思考発展を支援する》であった。教員は学生の学習への主体性促進を意図し, 各授業形態の利点を活かしたり, 欠点を補ったりする教授活動を実践していた。実習においては, 次なる教授活動を選定するための基盤となる《9. 学生にとってさらなる学習を要する部分を形式的に評価する》の意図的, 計画的な実践が教員の課題となることが示唆された。

5 看護職志望動機に関する文献検討—養成機関別の分析— (査読付)	共著	令和2年3月	常磐看護学研究雑誌, 2, p. 31-40, 2020	看護学生を対象に調査した文献から養成機関の種別による志望動機を比較検討することを目的とした。対象文献59件の養成機関別の内訳は、短大25件(1982-2009年)、大学17件(1989-2017年)、専門学校17件(1984-2015年)であり、志望動機の項目は各機関とも『選択の契機』等の10カテゴリーに分類された。看護職志望動機は共通するものもあるが、看護基礎教育の高等教育化に伴い大学・短大志向のような養成機関選択の理由が志望動機の一要因となるといった違いも明らかとなった。 本研究の分析、論述等を共同で行った。 共著者：細矢智子、山口幸恵、北島元治、河津芳子
6 急性期病院に入院した認知機能の低下がある高齢患者への看護実践—看護師の認識調査からの分析— (査読付)	共著	令和2年9月	国立病院看護研究学会誌, 16(1), p. 52-58, 2020	急性期病院の病棟看護師が認識する、認知機能の低下がある高齢患者への看護実践の内容を明らかにすることを目的とし、一般病棟所属の管理職でない看護師を対象に、5カテゴリー25項目を5段階評価する質問紙を自作し、対象者が認識する認知機能が低下している高齢患者への看護実践を調査した。対象者は自身のコミュニケーションスキルを高く評価していた。認知機能の低下がある高齢患者にとって心地よい環境の提供は、不安や混乱の軽減につながるため、患者同士の交流がもたらす心理的効果に目を向けた看護実践が課題となることが示唆された。 本研究の分析、論述を共同で行った。 共著者：橋本真紀、山口幸恵
7 看護系大学を志望した動機に関する文献検討—看護系大学学生を対象とした研究の分析— (査読付)	共著	令和3年3月	常磐看護学研究雑誌, 3, p. 25-34, 2021	看護系大学の学生を対象に調査した文献を検討し、看護系大学を志望した動機の種類を明らかにすることを目的とし、1989年～2017年までの看護系大学学生を対象に志望動機を調査した17文献を検討した。志望動機を表す329項目を、Berelson, Bの内容分析を参考に、意味内容の類似性を検討、集約し、カテゴリー名を付したところ、看護系大学に入学した学生の志望動機は、【体験を契機とする興味・関心】【幼い頃からのあこがれ・夢】【資格取得を志向】【大学進学を希求】など、21カテゴリーを形成した。21カテゴリーは、学生の学修継続の意志を強め得る動機、入学後の学修満足度を高め得る動機、時代の変遷を経ても変わらず存在する動機、大学入学を優先とした動機などの特徴を示した。 本研究の分析を共同で行い、論文全体の執筆を担当した。 共著者：山口幸恵、細矢智子、北島元治、河津芳子
8 新設看護学部入学生の看護職志望動機と学習意欲の関連 (査読付)	共著	令和3年3月	常磐看護学研究雑誌, 3, p. 35-44, 2021	新設看護学部入学生の看護職志望動機を明らかにし、学習意欲との関連について検討することを目的とし、A大学1年生を対象に、自記式質問紙および小竹ら(2014)が開発した「看護学生用学習意欲尺度」を用いて調査した。71名の分析から、学生の看護職志望動機は看護職の価値認識に関する割合が高く、大学志向を示すものや消極的な動機も含まれ多様であること、志望動機の『医療関係の分野に興味がある』、『人の世話が好き』、『看護職は将来性がある』と弱い正の相関、『成績に見合った大学学部』と弱い負の相関があった。また、『看護職は経済的に自立できる』や『入学前、適性検査で看護職に向いているとでた』は、下位尺度の「学習に対する自己の現状理解」と正の相関があった。 結論として、志望動機が多様な入学生に対し、継続したキャリア支援と同時に学生の学習意欲を高めるような教育の質を確保する必要性が示唆された。 本研究の分析、質問紙作成等を担当した。 共著者：細矢智子、北島元治、山口幸恵、河津芳子

<p>9 COVID-19禍の基礎看護学実習Ⅲにおける臨地・学内併用実習の実践報告（査読付）</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年3月</p>	<p>常磐看護学研究雑誌, 5, p. 23-34, 2023</p>	<p>目的： COVID-19により、2022年度基礎看護学実習Ⅲの臨地・学内併用実習について振り返り、今後の実習に向けた課題を見出す。 方法：「成績評価」「看護技術の到達度」「授業アンケート」の結果を踏まえ、実習目標の到達度および実習方法について考察する。 結果：従来の実習と比較し、実習目標「立案した援助を安全・安楽・自立を考慮して実施できる」の評価が高く、看護技術「清拭」「陰部洗浄」の到達度の割合に差はみられなかった。これは、臨地での限られた経験を実習指導者や教員が詳細に指導したことや、学内実習における経験で補っていたためと考えられた。しかし、「手浴・足浴」「洗髪」は臨地・学内併用実習の方が低かった。また、授業アンケートには、実習記録の提出が厳しいという記述があった。 結論：今後に向け、学内実習の事例および援助内容と実習記録の提出について検討する必要性が示された。また、実習施設への依頼や調整をより綿密に行うと共に、教員の教育力の維持・向上と、結果を踏まえた実習内容の改善および充実が課題となった。 本研究のデータ分析、現行の校正、研究プロセス全体への助言を担当した。 共著者：細矢智子, 山口幸恵, 北島元治, 萩野谷浩美</p>
<p>(その他) 「総説等」 1 “抑制”はナースのジレンマ 後ろめたさを感じないために 安全安楽を考慮した抑制方法の検討 抑制帯使用の基準を作成して</p>	<p>共著</p>	<p>平成9年10月</p>	<p>照林社, Expert Nurse, 13(2) : 49-51, 1997</p>	<p>抑制帯装着に伴う皮膚障害や不穏状態の助長を防止するため、抑制帯の装着・除去基準及び抑制帯装着中の観察項目リストを作成した。これにより、ライン類の自己抜去に対する予防的装着から根拠ある装着が可能となり、抑制を実施せざるを得ない状況における看護師のジレンマを軽減する可能性を示した。 本研究の調査、論述等を共同で行ったため、本人担当部分の抽出不可能。 共著者：成田智子, 植竹幸子, 山口幸恵他</p>
<p>2 特集 実習指導虎の巻 第2部 「学生の主体性を引き出すには」</p>	<p>単著</p>	<p>平成30年8月</p>	<p>医学書院, 看護教育, 59(8), p. 601-604, 2018</p>	<p>看護学実習において学生の主体性を引き出し、促進する教授活動とは何かについて、自身の研究成果を踏まえて示唆を述べた。</p>
<p>「研究助成金等」 1 足浴の浸漬面積の違いによるリラクゼーション効果の検証</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年5月</p>	<p>厚生労働省看護研修研究センター第29回研究発表集録, p. 16-25, 2008</p>	<p>平成19年度 厚生労働省看護研修研究センター助成金研究 足浴時の下肢の浸漬面積の違いによるリラクゼーション効果を明らかにすることを目的とし、実験を行った。主観的・客観的評価により、足浴にリラクゼーション効果があることが証明され、下肢の浸漬面積による差はないことが明らかとなった。 本研究の実験、論述等は共同で行ったため、本人担当部分の抽出不可能。 共著者：山口幸恵, 板垣裕子, 片山典子他</p>
<p>2 看護学実習における学生の「振り返り」に影響する要因—「自己を見つめる力」と振り返り内容との関係—</p>	<p>代表</p>	<p>令和4年4月</p>	<p>—</p>	<p>2022年度日本看護学研究会研究助成 令和5年8月、日本看護学教育学会第33回学術集会で発表。同学会誌に論文投稿中（令和6年5月現在）。</p>

<p>「学会発表等」</p> <p>1 緊急手術後不穏を呈した患者への心理的援助を振り返って</p>	<p>—</p>	<p>平成6年3月</p>	<p>平成5年9月 茨城県救急医学会にて発表（茨城）茨城県救急医学会雑誌，17，p.88，1994</p>	<p>重症腹膜炎のため緊急手術適応となり手術後不穏状態を呈した患者への看護の事例研究。緊急入院による手術であっても、術前・術直後から混乱するであろう患者の状態を理解しつつ、現状認知を促進する看護が必要となることが示唆された。 本研究の論述は単独で行い共著者に助言を受けた。 共著者：山口幸恵，増子みどり</p>
<p>2 クモ膜下出血患者の術前看護を見直して一最小の刺激で最大のケアを—</p>	<p>—</p>	<p>平成7年4月</p>	<p>平成6年11月 第22回日本救急医学会総会：看護部会にて発表（東京）エマージェンシー・ナーシング，8(4)：353，1995</p>	<p>クモ膜下出血の手術前の鎮静下において安全に看護ケアを提供することを目的とし、看護ケアによるバイタルサインの変動を調査した。十分な鎮静下であることの判断と共にケア時間の短縮を念頭においた方法の工夫により、安全なケア実施が可能であることが示唆された。本研究の調査は共同で行い、論述は単独で行った。 共著者：山口幸恵，増子みどり</p>
<p>3 救命センターにおける睡眠ケアの一考察</p>	<p>—</p>	<p>平成8年4月</p>	<p>平成7年11月 第23回日本救急医学会総会：看護部会にて発表（福岡）エマージェンシー・ナーシング，9(4)：373，1996</p>	<p>救命救急センターの特殊環境下であっても患者が質の高い睡眠を確保できることを目的とし、就寝前ケアとして足浴を実施し、効果を調査した。足浴により質の高い入眠が得られた要因は、足浴の入眠効果とともに、夜間に看護師が患者と個別に関わる時間を確保したことによる充足感であることが明らかとなった。 本研究の調査、論述等を共同で行った。 共著者：山口幸恵，仲村悦子他</p>
<p>4 アセスメントに重点をおいた抑制基準の再検討</p>	<p>—</p>	<p>平成10年2月</p>	<p>平成9年9月 茨城県救急医学会にて発表（茨城）茨城県救急医学会雑誌，22，p.86，1998</p>	<p>救命救急センターで使用している抑制基準を再考することを目的とし、現状の問題点を調査した。基準の捉え方に経験による個人差が加味されていることが明らかとなり、アセスメントを重視した基準へと改善するための示唆を得た。 本研究の調査、論述等を共同で行った。 共著者：鈴木順子，植竹幸子，山口幸恵他</p>
<p>5 口腔ケアの改善に向けての一考察—口腔ケアチェックリストを活用して—</p>	<p>—</p>	<p>平成11年10月</p>	<p>平成11年9月 国立病院療養所総合医学会学会にて発表（大阪）医療，53増刊，p.472，1999</p>	<p>看護師は毎勤務帯毎に口腔ケアを実施していたが、口腔粘膜の障害や口臭などが残存する事例があり、その改善を目的として口腔ケアチェックリストを作成した。チェックリストに基づく口腔ケア実施により、口腔粘膜の障害や口臭残存は改善し、ケア方法や頻度の見直しのための資料として活用できることが明らかとなった。 本研究の調査、論述等を共同で行った。 共著者：菅原和江，河原井史江，山口幸恵他</p>
<p>6 当センターにおける事故分析</p>	<p>—</p>	<p>平成12年10月</p>	<p>平成12年10月 国立病院療養所総合医学会学会にて発表（神奈川）医療，54増刊，p.586，2000</p>	<p>救命救急センターで発生した事故事例を分析し、事故が頻発しやすい時間帯等が明らかとなった。これに基づき、事故頻発時間帯の業務整理の必要性などの示唆を得た。 本研究の分析、論述等を共同で行った。 共著者：大里みどり，小野美智代，山口幸恵他</p>
<p>7 臨地実習が影響する学生の人間関係形成能力の実態—2学年の初回成人・老年看護学実習前後の変化</p>	<p>—</p>	<p>平成15年6月</p>	<p>平成15年7月 日本看護研究学会 第27回学術集会にて発表（石川）日本看護研究学会雑誌，26(3)：379，2003</p>	<p>看護学校2年生の初回実習前後の人間関係形成能力を調査した結果、実習経験により人間形成能力が高まることが明らかとなった。 本研究の分析、論述等を共同で行った。 共著者：櫻井敬子，山口幸恵，菅沼澄江他</p>

8 臨地実習で学生が認識するほめられた場面とその後の変化—学生と実習指導者との関わり—	—	平成15年10月	平成15年10月 第57回国立病院療養所総合医学会にて発表（北海道）医療57巻増刊，p. 328，2003	臨地実習において実習指導者が学生をほめたと認識した場面と学生がほめられたと認識した場面を調査した。指導者がほめた場面と学生がほめられたと認識した場面に相違があり、学生がほめられたと認識したのは指導者からの承認等であることが明らかとなった。実習指導において、承認の機会を活用する意義が示唆された。本研究の調査、論述等を共同で行った。 共著者：山口幸恵、櫻井敬子、菅沼澄江他
9 足浴のリラクゼーション効果に関するエビデンスの現状—我が国における1995～2004年の文献の分析—	—	平成17年11月	平成17年11月 日本看護技術学会 第4回学術集会にて発表（茨城）日本看護技術学会学術集会講演抄録集4回，p. 63，2005	足浴のリラクゼーション効果に関するエビデンスを明らかにすることを目的とし、国内文献を分析した。質の高いエビデンスを確保するためにランダム化比較試験を用いる必要性や、リラクゼーション効果を期待できる足浴方法のエビデンスの状況が明らかとなった。 本研究の分析、論述等を共同で行った。 共著者：片山典子、小林紀明、山口幸恵他
10 足浴の浸漬面積の違いによるリラクゼーション効果の研究— $\alpha$ 波と主観的感覚両面からの評価—	—	平成20年8月	平成20年8月 日本看護学教育学会 第18回学術集会にて発表（茨城）日本看護学教育学会誌，18巻学術集会講演集，p. 286，2008	足浴時の下肢の浸漬面積の違いによるリラクゼーション効果を明らかにすることを目的とし、実験を行った。主観的・客観的評価により、足浴にリラクゼーション効果があることが証明され、下肢の浸漬面積による差はないことが明らかとなった。 本研究の実験、論述等を共同で行った。 共著者：菅山明子、板垣裕子、山口幸恵他
11 質の高い学生の確保に向けた取り組み—推薦指定校の進路指導担当者を対象とした学校説明会を実施して—	—	平成23年10月	平成23年10月 第65回国立病院総合医学会にて発表（岡山）国立病院総合医学会講演抄録集，p. 468，2011	自校が望む入学生確保のため、推薦指定校の進路指導担当者を対象に学校説明会を開催し、その効果についての実践報告を行った。進路指導担当者からは、学校が望む人材像がわかり高校内で推薦者を決定する際の参考になる、受験及び入学までの期間にどのような学習を勧めればよいかを理解できたとの評価を得た。 本研究の調査を共同で行った。 共著者：平井隆行、森田展子、山口幸恵他
12 足部温罨法による睡眠導入効果—温タオルと足浴の比較検討—	—	平成23年10月	平成23年10月 日本看護技術学会 第10回学術集会にて発表（東京）日本看護技術学会学術集会講演抄録集10回，p. 168，2011	足部温罨法により、足浴と同様の睡眠導入効果が得られるかを明らかにすることを目的とし実験を行った。その結果、主観的・客観的評価とも有意差はなかった。また、主観的評価において、足浴、足部温罨法ともに睡眠導入効果が認められたことから、足部温罨法が睡眠導入を促す援助方法の選択肢の一つとなり得ることが示唆された。 本研究の実験、論述等を共同で行った。 共著者：山口幸恵、菅山明子、加藤志保子
13 学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の教授活動	—	平成27年7月	平成27年8月 日本看護学教育学会 第25回学術集会にて発表（徳島）日本看護学教育学会誌25巻学術集会講演集，p. 122，2015	学生の学習への主体性促進を意図して看護学教員が実践している教授活動を明らかにすることを目的とし、全国の看護系大学・短期大学・専門学校看護学教員を対象に質問紙調査を行った。ベレルソンの方法論を参考にした看護教育学における内容分析により分析した結果、看護学教員は、学生の学習への主体性促進を意図して32種類の教授活動を実践していることが明らかとなった。また、これら教授活動は10の特徴を示した。 *学位論文 本研究の論述は単独で行い、共著者に助言を受けた。 共著者：山口幸恵、松田安弘、山下暢子、吉富美佐江

14 学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別教授活動	—	平成28年8月	平成28年8月 日本看護研究学会第42回学術集会にて発表（茨城） 日本看護研究学会第42回学術集会講演抄録集，p. 209，2016	学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別の教授活動を明らかにし、授業形態の特徴に応じた教授活動への示唆を得ることを目的とし、特定の授業形態における教授活動を明示した記述を、ベレルソンの方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用いて分析した。その結果、講義・演習共に「内発的動機付けを高める授業を設計し展開する」が、実習においては「学生の理解促進と思考発展を支援する」が最も頻繁に用いられていた。これらは、それぞれの授業形態の欠点補い、利点を強化する教授活動であることが示唆された。 本研究の論述等は単独で行い、共著者に助言を受けた。 共著者：山口幸恵，松田安弘
15 中堅看護師の自己研鑽につながる学習支援	—	平成28年12月	平成28年12月 第14回国立病院看護研究学会学術集会にて発表（熊本） 第14回（2016年度）国立病院看護研究学会学術集会抄録集，p. 55，2016	中堅看護師の研修参加理由及び意図して選択した研修の内容を明らかにし、中堅看護師の自己研鑽につながる学習支援への示唆を得ることを目的に質問紙調査を行った。結果、研修参加が増えた中堅看護師の学習ニーズは研修参加により更に高まっていた。中堅看護師が選択した研修の多くは「日常看護の刷新と専門化に関する研修」であり、選択した研修内容は学習ニーズとの照合が可能であった。中堅看護師の自己研鑽につながる学習支援として、自身に必要な学習を評価できる機会の提供、研修参加による学習成果の承認、中堅看護師個々の目標に叶う研修に関する情報提供や研修参加を可能にする勤務調整の必要性が示唆された。 本研究の調査、論述等を共同で行った。 共著者：松岡宣代，山口幸恵
16 副看護師長の看護管理者役割遂行における困難と必要な支援—看護師長代行時に副看護師長が認識する困難に着目して—	—	平成30年8月	第49回日本看護学会：看護管理学術集会にて発表（宮城） 第49回日本看護学会：看護管理学術集会抄録集，p. 151，2018	副看護師長が各看護単位において、看護管理者役割を遂行する上で困難と認識していることを明らかにし、その困難を克服するための支援について示唆を得ることを目的に質問紙調査を行った。結果、自由回答式質問に回答があった174名の記述は「患者・家族からの苦情対応」 [スタッフ事情に伴う勤務調整]等、23カテゴリを形成し、副師長が師長代行時に認識している困難は「病棟管理業務遂行のための知識・技術・態度の不足」「自身の経験を直面する状況に照合し行動する力の不足」等に起因した。師長は、副師長の師長代行時の体験を今後活かすため共に振り返る機会を設け、副師長の自己評価を支援する必要性が示唆された。 本研究の調査、論述等を共同で行った。 共著者：竹内多真枝，山口幸恵，草間里美，吉原好子
17 看護職志望動機に関する文献検討—看護系大学の学生を対象とした研究の分析—	—	平成31年8月	第50回日本看護学会-看護教育学術集会にて発表（和歌山） 第50回日本看護学会-看護教育学術集会抄録集，p. 171，2019	看護系大学の学生を対象に看護職志望動機を調査した文献を検討し、看護系大学に入学した学生の看護職志望動機の種類を明らかにすることを目的とした。分析対象とした文献17件は、1989年～2017年の間にあり、看護職志望動機を表す265項目は、「1. 選択の契機」等の11カテゴリとなった。看護職志望動機には、「経済的能力の獲得」のように時代の変遷を経ても変わらず存在する動機や大学入学を優先した動機等が存在した。本研究結果は、多様化する学生の看護職志望動機の把握を目指す調査の参考資料として活用可能であることが示唆された。 本研究の分析、論述等を共同で行った。 共著者：山口幸恵，北島元治，細矢智子，河津芳子

18 看護職志望動機に関する文献検討—養成機関別の分析—	—	平成31年9月	第21回日本看護医療学会学術集会にて発表（名古屋） 第21回日本看護医療学会学術集会抄録集，p. 40，2019	看護学生を対象に調査した文献から養成機関の種類による志望動機を比較検討することを目的とした。対象文献59件の養成機関別の内訳は、短大25件(1982-2009年)、大学17件(1989-2017年)、専門学校17件(1984-2015年)であり、志望動機の項目は各機関とも『選択の契機』等の10カテゴリーに分類された。看護職志望動機は共通するものもあるが、看護基礎教育の高等教育化に伴い大学・短大志向のような養成機関選択の理由が志望動機の一要因となるといった違いも明らかとなった。 本研究の分析、論述等を共同で行った。 共著者：細矢智子，山口幸恵，北島元治，河津芳子
19 急性期病院に入院する認知機能が低下した高齢患者への看護実践—看護師の認識調査からの分析—	—	令和元年12月	第17回国立病院看護研究会学術集会にて発表（東京） 第17回国立病院看護研究会学術集会抄録集，p. 74，2019	急性期病院の病棟看護師が、認知機能が低下した高齢患者の看護実践の内容を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。結果、対象者は「Ⅰ. 認知機能の低下がある高齢者の入院による混乱の緩和を目指すコミュニケーション」を実践している認識が高く、「Ⅱ. 認知機能の低下がある高齢者の意思を尊重し、ニーズに沿った看護」を実践している認識は低かった。これらは、研究対象者が自身のコミュニケーションスキルを高く評価しせん妄への対策等、事故防止を念頭に置いた看護実践を行っていると言えた。一方、認知機能が低下した高齢患者にとって心地よい環境を提供することは不安や混乱の軽減につながるため、患者同士の交流がもたらす心理的な側面にも目を向けた看護実践を行うことが課題であることが示唆された。 本研究データの分析、論述等を共同で行った。 共著者：橋本真紀，山口幸恵
20 新設看護学部に入学者の看護職志望動機と学習意欲の関連	—	令和2年9月	第22回日本看護医療学会学術集会，2020年9月21日，神戸（オンデマンド）	新設看護学部学生がもつ志望動機の種類と学習意欲との関連を把握することを目的とし、自記式質問紙での調査を行った。志望動機は先行研究より自作し、学習意欲は看護学生用学習意欲尺度（使用許諾済）を用いた。分析は、志望動機と学習意欲得点の関連は、ピアソンの積率相関係数を算出した。結果、分析対象者71名の志望動機の全項目で「かなりあてはまる」の回答があった。平均が最も高かった項目は『看護職はやりがいがある』等であり、平均が低かった項目は『本当になりたい職業をあきらめた』等であった。学習意欲と有意な正の相関を示した項目は『医療関係の分野に興味があった』等であり、有意な負の相関を示した項目は『成績に見合った大学学部であった』であった。多くの学生が看護職の価値を認識して志望しており、看護を身近に感じる体験により医療への興味・関心が高まり、看護職の価値や適性の認識が自身の目指す将来像を明確させることで学習意欲を高める要因になると考える。一方、成績に合わせた入学と認識している学生の学習意欲は低い傾向が示され、消極的動機の入学生も一定数存在することから、入学後早期に実習等で現場に触れる体験や先輩看護職の体験を聞く機会を設ける等、学生が看護への興味・関心を持つる授業を行う重要性が示唆された。 本研究の質問紙作成を担当し、分析を共同で行った。 共著者：北島元治，細矢智子，山口幸恵，河津芳子

<p>21 看護学実習における学生の「振り返り」に影響する要因 —「自己を見つめる力」と振り返り内容との関係—</p>	<p>—</p>	<p>令和5年8月</p>	<p>日本看護学教育学会第33回 学術集会, 2023年8月26日, 福岡</p>	<p>看護学実習における学生の「振り返り」に影響する要因を学生の「自己を見つめる力」と振り返り内容との関係から明らかにし、その特徴を考察することを目的とし、基礎看護学実習を終了した学生の実習における「振り返り」の記述を内容分析、「自己内省に関する項目」は因子毎の平均値を算出、振り返りたい場面の有無、肯定的・否定的感情をもたらした体験等で群別し、有意差を確認した。結果、習における学生の「振り返り」に影響する要因は、【患者の反応の認識】等の10カテゴリーを形成し、「自己内省に関する項目」の群別比較に有意差はなかった(<math>p &lt; .05</math>)。実習における学生の「振り返り」に影響する要因は、〔双方向性のコミュニケーションによる患者との関係形成〕等の4つの特徴を示した。これらは、教員が、学生の体験とその意味づけの内容を把握し、問いかけにより思考の発展や深化を支援する等の教授活動を展開する必要性を示唆した。 共著者：山口幸恵, 細矢智子</p>
---	----------	---------------	---	---